

**第2講座「図書館で本と出会う即興劇15編」**

講師：鳥取大学非常勤講師 宍道 勉 氏  
北海道武蔵女子短期大学教授 木村 修一 氏

**【前編】図書館で本と出会う即興劇15編**

鳥取大学非常勤講師 宍道 勉

はじめに

タイトルの図書館と「劇」はそぐわないけど、司書が演出家となり利用者（子どもたち）を役者とすれば、舞台の「図書館」が元気な場所になるのでは？の意図がある。

というのもコロナ禍と急速なスマホ社会への変化で図書館とその「利用者」に活気がないように思える。しかも、日本人には誤った「読書」「図書館」観があるように思えてならない。



- 1) 本を読むのは「学び」に必要である
- 2) 「本」は「全て読み、内容を覚えなければならない」
- 3) 図書館は本を借り、読むところ

「即興劇」も読書・図書館の見直しの一提案である。それは、

- 1) 読書は「本は読む」前に「出会い」「触れる」から始まっている。また本は勧めたり、勧められるものでなく「自分で選ぶ（出会う）」ものである。
- 2) 図書館とは「読むところ」である前に、本に触れる「場」であり、「借りるところ」よりのんびり寛ぐ「場」である、ことを。

今回紹介した即興劇3部は司書と利用者（子どもたち）を想定して演じたものである。（「どんぐりとヤマネコ裁判」は大学生の取り組みも載せた。）

**1.即興劇「しりとりで本と出会う」**

しりとりは即興で（すぐ）、どこでも、誰でもできるゲームである。この「劇」で本と出会う場は児童図書館、出会いの演技は子どもたち、演出を（学校）司書が務め、出会うことばのきっかけをしりとりから生むのである。

この5人のしりとりはねこ→コアラ→ラクダ→ダチョウ→うま、とした。

最初の「ねこ」の役者を例に劇の台本と記録用に「カード」を作っている。

- 1) (紙の) 国語辞典で「ねこは昔から家の中で飼われる愛玩動物」と知る。
- 2) また「ねこ」からふと（即興）浮かんだ「じゃれる、ねずみ、かわいい」は、ねこ「役者」が考え定義する作業である。
- 3) 図書館の書棚をめぐり、出会った本が、山崎ナオコーラ『かわいいお父さん』こぐま社、2017である。

**記録**

国語辞典の意味 ③

ねこ 猫	①昔から家の中で飼われる愛玩動物 ②家の中で飼われる、ふわふわした毛の動物 ③「ねこ」と聞いて（即興で）浮かんだこと ④ピンときた本 ⑤本の中に見つけたことば
	(じゃれる, ねずみ, かわいい) 山崎ナオコーラ「かわいいお父さん」 こぐま社、2017 おとうさん、かわいい おとうさん かわいい

## 第2講座

- 4) 選んだ本をめくりながら気になる「ことば」のあるページに付箋を貼る（本例は「おとうさん、かわいい」）。
- 5) 出演の5人の台本ができたなら司書やみんなに、お互いが付箋ページを中心に本を語る（即興劇）ものである。
- 6) 終わったらしばらくの間、本とカード（本に貼った付箋を取って貼り直す）を図書館に展示する。

### 2.即興劇「注文の多い図書館」

タイトルでお気づきのとおり、宮澤賢治『注文の多い料理店』にヒントを得た即興劇である。「山猫料理店」の店主（山猫）が客に向かって「ああしろ、こうしろ」と「注文」する、それを变だと気づいたお客が逃げるお話である。

本来料理店とはお客が注文する、それを店主がお客に注文する、この逆の発想を取り入れたものである。

つまり通常図書館で行われる司書が聞き手にあるテーマについて集めた本を紹介するブックトークを、この劇では役者（子どもたち）が司書にブックトークするのである。

- 1) 演出の司書が子どもたちに「テーマ（たから）」を注文することから始まる。
- 2) 子どもたち5人は国語辞典で「ことば（＝たから）」の意味を調べ、カードに記入する。
- 3) 「たから」と聞いて「即興」で頭に浮かんだ「こと」＝インスピレーションをカードに書く。

- 4) 一人は「たから」と聞いて大好きな「おかあさん」と決めた。

- 5) 書棚を巡って出会った本は、怪獣と遊んだ夢から覚めた時、迎えに来てくれた優しいお母さんが登場する、モーリス・センダック『かいじゅうたちのいるところ』だ。

- 6) 本の中に見つけた気になる「ことば」のページに付箋を貼る。

- 7) 5人の「たから」が5冊の「本」が選ばれた

ら、司書に一人ずつ「注文にお応えします」と、付箋ページを中心のブックトークをする。

- 8) 終わったらしばらくの間、本とカード（本に貼った付箋を取って貼り直す）を図書館に展示する。

#### 会合の記録

国語辞典に書かれた意味

① たから 宝	② 貴重なもの あなたにとって「たから」とは ③ お母さん
ピンときた本 本の中に見つけたことば 選んだ理由	④ モーリス・センダック「かいじゅうたちのいるところ」富山房（1975） ⑤ 夕ご飯、おかあさん ⑥ 目が覚めた時お母さんが夕ご飯だよと呼びに来てところに優しさを感じた

### 3.即興劇「どんぐりとヤマネコ裁判」

日頃は「本」が面倒で、難しく、嫌い、苦手とか理由を付けて読まない「人たち」に、読まないのは「本が悪い、本のせい、本の罪」にして、本の裁判をする。これも宮澤賢治『どんぐりと山猫』をヒントに思いついた劇である。まずは子どもたち5人に、

- 1) 演出の司書が「本の裁判所（図書館）の裁判官（司書）です。嫌いな本を見付け「裁判」で本の悪口を言いましょう。集まりませんか？」と呼びかける。
- 2) 集まった役者は検察官の役で書棚を巡り「嫌いな」本を選ぶ。
- 3) （一人は）『百万回生きたねこ』佐野洋子文・絵、講談社、1977を選んだ。
- 4) 本を広げて見つけた「嫌いな理由」気になる「ことば」やイラストのページに付箋を貼る。

## 第2講座

- 5) 本の情報や「嫌いな言葉」などをカードに記入する。
- 6) みんなに本とカードを回し、読み終わるのを待ちます。
- 7) 終わったら誰か一人でも「嫌いでない」と言えば無罪となり、意見がなく「弁護」がなければ「嫌いな本」で有罪となる。
- 8) 劇を終えたあと、終わったらしばらくの間、本とカード（本に貼った付箋を取って貼り直す）を図書館に展示する。

「どんぐりとヤマネコ裁判」劇を北海道武蔵女子短期大学で行った演習は、参加者が多く6人ずつの5グループに分けた。まず各グループで学生たちが持ち寄った「読みたくない本」の悪口を言い、グループで1冊の有罪本を決めた。

最後に全員が集合し、裁判員裁判形式で各グループの有罪本が紹介され、質問や意見を求める。

「良い本」とか「見方によって面白い」で無罪が決まった。子どもたちの場合と異なるのは「嫌いな」理由が内容よりも、本の外観、作者嫌いなどに及んだ点である。大学は後日、有罪本を「図書館」に展示している。

### 検察官の告訴状

	①百万回生きたねこ 佐野洋子 文・絵、講談社 1977
嫌なことば	②戦争、泣く（付箋の場所の言葉）
内容	③王様、船乗りなどに会った猫がどのように生きたか
告発理由	④読んで悲しくなった、 <sup>せう</sup> 二度と読みたくない

### まとめ

本論は、論者が実生活において行なっていることに基づいている。つまり「ことば」を大切にする点では、デジタル辞書を使わない。本を読むとき場合、気になった言葉や人名、書名に付箋を貼る習慣があり、次に読む本を選ぶ参考とする。本との出会い記録をカードの「日記」としている。

今回紹介の即興劇を含め15編を作成した（未完成も含む）。今回もご一緒させていただいた北海道武蔵女子短期大学の木村修一先生とこれをまとめて公表する計画をしている。

- 1) 「しりとりで本と出会う」
- 2) 「注文の多い図書館」
- 3) 「どんぐりとヤマネコ裁判」
- 4) 「レファレンスごっこ」
- 5) 「私の読みたい本を選んで」
- 6) 「反対語で本を選ぼう」
- 7) 「どの本を読みますか」
- 8) 「おしゃべりブックトーク」
- 9) 「時間泥棒をつかまえよう」
- 10) 「本を演奏する楽団」
- 11) 「なぞなぞブックトーク」
- 12) 「星の王子さまの本めぐり」
- 13) 「ドンキホーテの読書道」
- 14) 「わからないしかし面白い本」
- 15) 「新聞のコラム・ブックトーク」

最後に「2021年度北海道図書館大会」にお招きいただきましたこと、大いなる感謝を申し述べて終わります。

【後編】「図書館で本と出会う即興劇」の検証～読書の意味を問う内省のプロセス～

北海道武蔵女子短期大学教授 木村 修一

はじめに

「図書館で本と出会う即興劇」を略して、ここでは「即興劇」と呼んでお話しする。私が宍道先生の編み出した「即興劇」に興味を持ち実践したときに感じたのは、参加した学生がとても楽しんでいるという点である。学生の表情がとても良く、何が起きているかを知りたいため分析を行った。「即興劇」に参加したことにより学生は、どのように本に出会い、本と向き合ったのか。また、読書を自分の中に意味付ける内省はいかに起きたのかについて紹介する。



I. 「本と出会う即興劇」基本的な考え方と特徴

宍道先生は、「即興劇」と呼ぶ読書法を編み出しそうとした意図について、学習指導要領にある「生きる力」教育が求める「主体的・対話的で深い学び」を実現するためには、主体的な学びの継続と習慣化が必要だと考え、調べ学習の新しい方法に、「レファレンスごっこ」という読書法を考案したと言っている。「図書館を使いそこで、児童・生徒が自主的な学びをする」というのが宍道氏の開発した「即興劇」を貫く理念である。

「即興劇」に共通する点を挙げる。①参加者が遊び感覚で仲間と興じる即興劇になっている。②あらかじめお題やテーマが与えられることが多いため、その意味を何も使わず自分の頭を使い解釈を試みる（脳内辞書を使う）。③脳内辞書の解釈を披露しあい、グループのメンバーとの意見交換を通じて、イメージーションを広げそれを本探しの拠りどころとする。④人に頼らず、OPACに頼らず、自力で本を探し書架から本を選びとる。⑤本を選んだ理由や本の概要を記録しグループ内に紹介しあう。⑥自分とは違う考え方を知り同時に、自分とは違う考え方より選ばれた、他者の本に出会う。以上が「即興劇」に共通する特徴である。

「即興劇」のイメージを持っていただくために、動画を少し見ていただく。

OPACは使わないルールがある。すぐ閲覧室の書架に行きブラウジングしながら本を探す。自分のイメージやインスピレーションだけが頼りとなる。本の背表紙を見ながらよさそうな本を手に取り、自分の関心に照らし合わせ吟味していく。最初はなれないため少し戸惑う。

閲覧室で本を見つけたあと、教室に戻り、本と向き合う。本の内容、本を選んだ理由等を考え、本の書誌事項とともに図書カードに記録していく。図書カードの作成を終えるとグループ内で一人ずつ、その本を選んだ理由や本の内容などを紹介する。同時に意見交換も行う。おのおののグループで本を紹介しあった後、全体で紹介したい一冊を決め、参加者全員に本を選んだ理由、本の内容などを紹介する。

II. 「学生の学び」分析手法

1. 分析方法

「即興劇」に参加した学生の気づきや学びをどのように分析したのかについて説明する。学生の学びの深化を探るためには、一人ひとりの気づきや内省に焦点を当てるべきとの判断にたち、「即興劇」に参加した学生には終了後、記述式にて感想をもとめた。分析にあたっては、質的研

究法の一つであり、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (Modified Grounded Theory Approach 以下 M-GTA という) を用い分析した。この分析法は、人間の行動と予測の説明に優れた内容であり社会的な実践的な場に活用されるための理論といわれている。

## 2.調査対象とデータ収集

本学図書館司書課程を受講している1年生および2年生を調査の対象とした。調査日、「本と出会う即興劇」名、回収人数は以下のとおり。

①2018年6月29日「レファレンスごっこ」1年生(33名)

利用者(住民、児童生徒、学生)が司書になりテーマに関連する図書を自分の脳内辞書を使い意味を考えインスピレーションをもとに創造力を広げ、自分が読みたい本を選ぶ。

②2018年6月29日「わからない、しかし面白い本を選ぶ」2年生(37名)

自分にとって難しく苦手だが面白い本を選ぶ。

③2019年6月7日「レファレンスごっこ」1年生(34名)

④2019年6月7日「ゼロ弾きのゴーシュはなぜ上手くなったか?」2年生(24名)

宮沢賢治『ゼロ弾きのゴーシュ』を読み、作品の中で使われている「レトリック(修辞)」に注目させ、本を自由に探す。

## Ⅲ.読書の意味を問う内省のプロセス

### 1.カテゴリの生成

「即興劇」に参加した学生にどのような内省が起きたのかについて説明する。

学生の内省を分析した結果、3つのカテゴリを生成した。

①「A.自分の関心に立ち、思いがけない本に出会う」

②「B.他者の考え方を受け入れ、他者の本に興味を覚える」

③「C.ひと任せの本選びから、自分が本を選ぶ意味を知る」

①は、自分自身の力で本を見つけるという経験は学生自身にとり本との出会いとなり、それもとても思いがけない新鮮な、驚きの出会いをしたという内省を示す。②は、グループ内で他者との意見交換を通して、自分とは違う考え方を知り、そのことについて自分の中で意味を問う時間となりさらには、他者が紹介する本に自分が知らなかった世界を見て、本に興味を覚えるようになる内省を示す。③は、自分が本を選ぶことに意味があるのではないかと考えるようになる内省を示す。

「即興劇」では、自分自身の力で本と出会う体験をする。他の人もその人の考えで本を探してくるので同じ体験をする。そういう本がグループ内で紹介される。人の考え方に触れる時間の中で思いがけない本に出会えたと感じる。他者同士の交流があるからこそそこには新しい情報が生まれる。これら一連の体験には、参加した学生が自分を振り返り、自分にとっての意味をなしていくプロセスが存在すると考える。「即興劇」の教育的意味ではないだろうか。

3つのカテゴリの関係性を図式化した図を見ていただきたい。「A」の「自分の関心に立ち、思いがけない本に出会う」と、「B」の「他者の考え方を受け入れ、他者の本に興味を覚える」、この二つの体験により、「本に出会う新しい気づき」が起きることを示している。したがって「A」と「B」が内省の要因になる。「A」「B」が引き金となって、それが「C」の「ひと任せの本選びから、自分が本を選ぶ意味を知る」プロセスが起きる。この関係性を「即興劇」に参加した学生の「読書の

意味を問う内省のプロセス図」と呼ぶ。

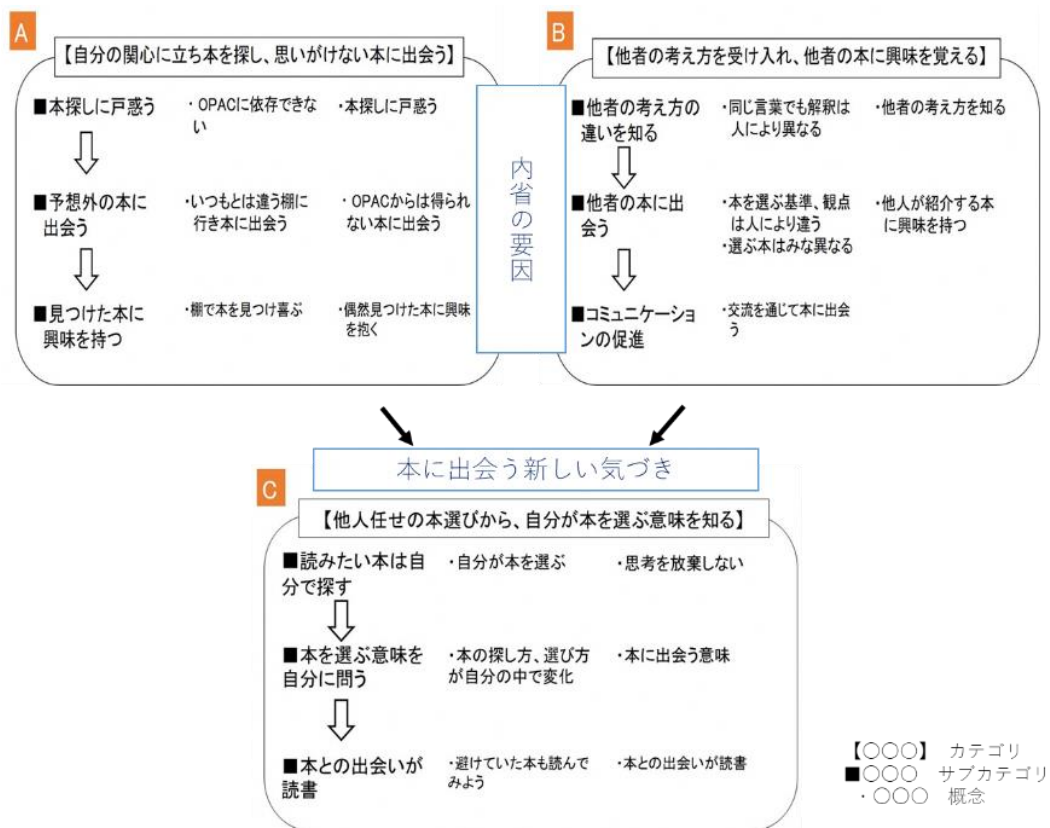


図 読書の意味を問う内省のプロセス

## 2. サブカテゴリの成立と学生のコメント

「A」「B」「C」を個々に詳しくみていく。各カテゴリ別に取り上げ、カテゴリを形成する前のサブカテゴリや学生の実際に感想を紹介する。

### 2.1 「A. 自分の関心に立ち、思いがけない本に出会う」

#### (1) 「本探しに戸惑う」

図書館で本を探す場合、図書館が所蔵する資料を探すためにOPACといわれるコンピュータ閲覧目録を使い検索結果から得られた情報をもとに本を入手するのが最も効果的な探し方といわれている。しかし、「即興劇」ではあえてOPACを使用せず、友人にも訊かないのがルールとなっている。そのため学生は、<本を探す戸惑い>の感情を抱いたまま閲覧室の書架に立ち入り本探しを始めなくてはならない。そのような経験をしたことがないため思うようにはいかない。学生は広い閲覧室の中でどのように本を探せばよいのか戸惑いを覚え苦勞する。

#### (2) 「予想外の本に出会う」

本を探す際にOPACは使用できないため書架をウロウロする。頼れるのは自分しかいない。本の背表紙を見ながらふと気にかけた書架上の本に目を止め、本に手を伸ばし目次や本文のページをめくる。自分のイメージにかなうかもしれないと反応が起きる。学生はここで偶然とはいえ、自分のひらめきや思いつきで本を見つけられたと感じる。しかもOPACからはきっと探せない本であったと納得する。この体験を学生は、「自分の知らない未知の領域に入った気分」と表現する。

### (3)「見つけた本に興味を持つ」

学生は最初、自力で本を探さなくてはならず不安を抱えるがやがて、試行錯誤を経て棚を自由にめぐる楽しさや面白さを感じるようになっていく。本を探している最中のモヤモヤとした感情は解消される。この体験を「有意義な時間」「達成感がある」「考察が深まった」「冒険をしているような気分」「創造力が鍛えられた」と表現する。また、書架で偶然見つけた「金子みすゞさんの詩画集」との出会いは、本に興味を抱きその本の著者である書き手についても知りたいと、興味・関心が呼び起こされる例である。

## 2.2.「B.他者の考え方を受け入れ、他者の本に興味を覚える」

### (1)「他者の考え方の違いを知る」

「即興劇」では本探しの前に、ある言葉をグループ内で共有し、脳内辞書を使いその解釈を披露しあう。一人ひとり異なる解釈をしており、＜他者の考え方の違いを知る＞ようになる。他者の考えに触れ、自分自身と反省的に向き合う体験をする。探してきた本を紹介しあう際にも、自分にはない他者の考え方に驚き、他者より紹介された本に興味を抱く。これは相手の価値観を認めるとともに自分を知る機会でもある。この自己の解釈とグループ内での意見交換を経て、インスピレーションを得る。これが本探しの鍵になる。

### (2)「他者の本に出会う」

他のメンバーが書架から見つけてきた本の紹介を受け、学生は、著者やジャンルも自分の本とは異なるものばかりであり、人により考えていることがこんなに違うのかと驚く。そのため本の紹介は楽しく、新鮮な時間になる。「生きる」と「歌う」のお題についての学生の感想を読むと、自分とは違う考え方や他のメンバーが選んできた本に驚く様子が分かる。今の自分ではおそらく出会わない、知り得ないであろうと、その本に興味を抱くようになり、その本の世界をもっと知りたいと思うようになる。また自分が紹介する本についてはグループ内のメンバーから、「面白そう」という意見が返ってくる。このような相互のやり取りにより、学生は自分のなかの本の世界感が少しずつ広がっていくような感覚を覚えていく。それを学生は本との出会いと表現する。



### (3)「コミュニケーションの促進」

グループ内において各自が、その一冊に特定した理由と本の内容を紹介すると、「わくわく感」や「楽しさ」を学生は覚える。そこは人の考え方に触れるところ、つまり、人との交流により＜新しいコミュニケーション＞が生まれる場になり、自分と他者との相互作用により新しい情報が生み出される時間となる。学生は人の考え方に触れ、思いがけない本にも出会えるのだと感じる。これを「つながりをつくるプロセス」と呼ぶ。

## 2.3.「C.他人(ひと)任せの本選びから、自分が本を選ぶ意味を知る」

「即興劇」のなかで学生がおこなうのは、インスピレーションを頼りに書架を自由に回り一冊の本を選ぶ行動である。閲覧室内のどの書架に行くかは自分が判断するしかなく、不安を抱きながらも書架の間を歩き、棚に並べられた本の背表紙を眺め、本をとりページをめくる。これを繰り返しているうちに、なんとなく、イメージに沿う本かもしれないという手応えを得る。自力で本を選んだのだという達成感や喜びを感じる。自分一人が考え本を見つける行為は、新しい本と

の出会いを生むのではと気づく。OPAC 検索よりもこの方がいろいろな本と出会えるのではないかと、本の探し方、選び方を見直す。学生はこのような経験を得て、＜本との出会いが読書＞だと気軽に考えることができたと言う。学生自身に読書の意味を問う内省が生じていると判断したい。

#### IV.読書支援の視座

「即興劇」に参加した学生の学びの分析を終えて、図書館が読書支援をする際の視座について考えてみたい。結論から言うと、読書支援に寄り添うには、「参加者に自己の内面に意味を問う機会、読む意欲や関心を育てる環境を用意」する考え方が大事なのではないか。その具体的な方法のために指針となるのが、今回の分析により示した以下の3点である。

##### (1)「自力で本を探す行動プロセス」を体験する機会を用意する

学生は自分が今までに身につけてきた経験や知恵を働かせ自分のなかのイメージを大きく膨らませる。そして、苦勞の末に何とか本を選び取る。自分の関心が満たされる手ごたえを得て、その時の気持ちを、OPAC では探せない、OPAC からは決して入手できない本に出会えたと表現する。これを「自分の関心により本の価値を意識化する行為」と捉える。

##### (2)「相手の関心や認識の内側に目を向ける」状況をつくる

学生は、自身のイメージやインスピレーションを使い、本を見つける。その本は自分にとって価値があると意識する一冊である。各自がそのようにして選び取る一冊一冊がグループの中で紹介される。持ち寄った本は自分とは異なる解釈が人それぞれの脳内で行われたからこそ選ばれているのだと知る。他者が紹介する本に興味を覚え読んでみたいと思う本も見つかる。このように自分も他人も選んできた一冊の本が「自己の関心により意識した一冊」だと認めることは、相手の関心や認識の内側に目を向けさせ、そこにつながりをつくらうとする行為そのものである。

##### (3)「コミュニケーションの促進」は新しい交流を生む

学びとは、他者の言葉に耳を傾け、差異の中につながりをつくりだし、他者との連帯を紡ぎあげる行為と言われる。宋道先生もまた「グループ学習を採用するのは、仲間を尊重し、助け合い、切磋琢磨し、互いにモチベーションが高まっていく様子が見られることにある。」と、お互いに聞きあうプロセスにグループ学習の意味があると主張している。一人ひとりが楽しみながら、お互いに読みの世界を交歓し、学生は「即興劇」を終えて「面白かった」「楽しかった」「嬉しかった」と表現する。

「即興劇」は、学生一人ひとりに経験的学びの機会を提供し、自己の内面に意味を問う内省の機会、読む意欲や関心を育てる環境を用意するものとなっているのではないか。

#### おわりに

今後の課題を二つ挙げる。一つは「即興劇」を小学生、中学生、高校生、大学生、大人の方など、広範囲に実践していきたい。二つ目に参加者にどのような学びや気づきが起きているのかについて、きちんと分析し、読書支援の意義を検証し続けていきたい。2年前になるが、いくつかの公共図書館のイベントにおいて児童向け「レファレンスごっこ」を本学の学生が進行役となり実践した。高校司書の研究会でも読書プログラムの紹介と演習をおこなった。また、本学が主催する「図書館員のリカレントプログラム」の参加者の中には自館のイベントに読書プログラムを取り入れてくれた方もいる。ご関心を持たれた方はぜひ一度、この「即興劇」を実践していただきたい。